

同一素性をもつ XP-YP 構造の認可について — 日本手話における観察事実から

浅田裕子

(昭和女子大学)

Chomsky (2013, 2014) が提案するラベリング・アルゴリズム (Labeling Algorithm) (以下 LA) によると、非主要部である二つの句 XP と YP が併合することにより形成された統辞的要素 [XP-YP] は、XP と YP が最も顕著な素性 F を共有する場合、F というラベルをもつ。例えば、(1) のような英語の顕在的主語をもつ Spec-TP 構文は、 $\langle \phi, \phi \rangle$ というラベルをもつ。

- (1) $[\alpha \text{ Tom}_{[\phi]} [\text{T}_{[\text{un}\phi]} [\text{Tom } v^* \text{ read a book}]]]: \alpha = \langle \phi, \phi \rangle$ (cf. Chomsky 2014)

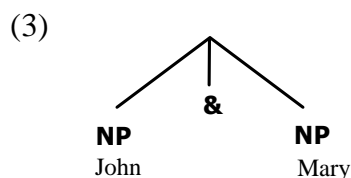
この例では、名詞句 (NP) *Tom* と時制句 (TP) は最も顕著な素性であるところの ϕ -素性を共有しており、NP の解釈可能な ϕ -素性と TP の主要部 T の非解釈可能な ϕ -素性が一致関係を結んでいる。Chomsky が提案する LA は、このように素性同士が異なった値をもつ「非対称的」な XP-YP 構造に適用することは可能であるが、果たして、例えば次のような XP と YP が共有する素性が全く同一の値をもつ「対称的」XP-YP 構造には、適用されるだろうか？

- (2) 対称的 NP-NP 構造 (*Symmetrical NP-NP structure*)
 $[\beta \text{ NP}_{[\phi]} \text{ NP}_{[\phi]}]$

(2) の統辞的要素 β を形成している 2 つの NP は、 ϕ -素性を共有している。しかしながら、(1) の統辞的要素 α の場合と異なり、これら ϕ -素性の値はともに解釈可能である。この場合、 β が解釈部門においてどのようなラベルをもつか、Chomsky の提案する LA からは明確ではない (関連議論に Citko 2011, 三輪 2015)。

このような理論的背景のもと、本論は日本手話 (以下、JSL) における観察事実に基づき、(2) の対称的 NP-NP 構造は、自然言語では認可されないと示唆する。

JSL における第一の観察は、等位構造に関するものである。等位構造の先行研究に、名詞句の等位接続は統辞的に次のような非階層的構造になっているという分析がある (Kuroda 1960, Goodall 1987, Moltmann 1992, de Vries 2005 など)。



この構造は、本論の議論する対称的 NP-NP 構造に該当する。ここで、JSL における等位構造構文の振る舞いを観察してみる (関連議論は小谷 (2009) を参照)。手話言語である JSL では、手や表情といった生理的に独立している複数の器官を使用することができるため (Sandler and Lillo-Martin 2006 など)、(3) にあるような統辞構造がもし本当に存在するとすれば、音韻部門で、この構造の二つの等位句と等位接続詞を同時に外在化することが潜在的には可能である。しかしながら、実際の観察事実はそうではない。(4) のように、等位構造の三つの要素

を ① 第一等位句と、顔のうなずき (hn) で表す等位接続詞; ② 第二等位句 の順番で線状に表現することは可能であるが、(5) のように、二つの等位句と等位接続詞を同時に表現する例は、母語話者に容認されない。

(4) $\frac{\text{hn}}{\text{HE}} \text{ YOU}$
 ‘彼とあなた’

(5) * $\frac{\text{hn}}{\text{HE}} \text{ YOU}$
 利き手
 非利き手
 ‘意図している意味: 彼とあなた’

この事実は、(2) の対称的 NP-NP 構造が自然言語では認可されないということを示す一つの証拠である。

第二の観察は、コピュラ文に関するものである。コピュラ文の統辞構造は、一般的に [John [be [small clause John [a teacher]]]] にあるような小節 (small clause) 構造になっていると考えられている (Moro 1997, Mikkelsen 2005 など)。更に、コピュラ文の類型研究には、等価的コピュラ文 (**identity copular sentences** (例: *John is Mr. Smith*)) は、叙述的コピュラ文 (**predicational copular sentences** (例: *John is a teacher*)) と異なり、コピュラで繋がれている二つの NP がともに指示的項 (referential argument) であり、従って、格を必要とするという議論がある (Partee 2000, Mikkelsen 2005 など)。本論では、現在の理論的枠組みでこの立場を踏襲し、等価的コピュラ文の二つの NP はともに解釈可能な ϕ -素性をもつと想定する。ではこの想定の下、次の JSL の例を観察してみよう。

(6) 叙述的コピュラ文
 HE TEACHER
 ‘彼は先生である.’ (米川 1984)

(7) 等価的コピュラ文
 *TAROO TAMADA
 ‘意図している意味: 太郎は山田さんである.’

(6) が示すように、英語のような言語と異なり、JSL はコピュラ文においてコピュラ動詞を必要としない (同様な言語にヘブライ語がある (Rothstein 2001 参照))。従って、(6) と (7) の二つの例はそれぞれ (8)と(9) のように分析される。

(8) [HE_[ϕ] TEACHER] (9) [TAROO_[ϕ] YAMADA_[ϕ]]

ここで、(9) は本論の議論する対称的 NP-NP 構造である。従って、この例の非文法性は、対称的 NP-NP 構造が自然言語では認可されないという記述を支持する更なる証拠となる。

最後に本論では、対称的 NP-NP 構造に関するこれらの記述を踏まえ、その理論的含意、特にバチソン (1973) の制約 (利き手に関する制約) との関連について議論する。